

望診とめまいの症例

臨床 § 症例

峯 尚志

症例提示

- 患者：38歳 女性
（身長156cm、体重49kg）
- 主訴：回転性めまい（vertigo）、耳鳴り、
難聴
- X年6月、緊張した顔つきで受診した。

現病歴

3月ごろより耳閉感がほぼ毎日続き、身体のむくみを自覚していた。

5月、突然天井がぐるぐると回り出し、頭痛と吐き気で起き上がれなくなった。難聴を伴い、耳鼻科でメニエール病と診断された。

投薬で一旦軽減するも、2週間後に再燃。その後は服薬しても改善せず、「これ以上の治療はない」と言われ、漢方治療を求めて来院した。



問診所見

- 職業は検品の仕事で、眼精疲労がある。
- 口が苦く、慢性的なストレスを抱える。
- 脇や腹が張り、こむら返りをよく起こし、瞼がときにピクピクと痙攣する。

初診の見立てと治療

訴えはいずれも「肝」に関わるものであった。

肝鬱気滞・肝血不足・肝風内動と見立て、逍遙散の加減方を処方した。

しかし、今ひとつ

ところが、治りが今ひとつであった。

湿熱の徴候

さらに詳しく問診すると、雨の前日に不調、小便の出が悪く、黄色く粘る帯下がある（湿熱の徴候）。

冷えの徴候

一方で、手足が冷え、温かいものを好む（冷えの徴候）。寒と熱が入り混じり、判断に迷った。



そのとき、目に驚いた

迷いながら患者の顔を見たとき、その目に驚いた。

異様にギラギラと光る目——しかも、視点が目の前20cmほどの一点に、しっかりと固定されているのである。

「どんなお仕事を？」

思わず、こう尋ねた。

「その目は、いったいどうしたんですか。お仕事について、詳しく教えていただ
けませんか」

顕微鏡をのぞく仕事

「半年前から、工業用の部品を顕微鏡で覗いて検品する業務に変わり、目を酷使していました。根をつめると、眉間を錐でえぐられるような頭痛がします」

患者は、ものすごい集中力で顕微鏡を見続けていたに違いない。

その集中力があだとなり、目に五臓のエネルギーが過剰に集中したのである。

転方、そして治癒

01

目は「肝の窓」である。肝胆系の湿熱が目に停滞していると考え、一貫堂の竜胆瀉肝湯へ転方した。

02

すると、みるみる効果が現れた。変方後2週間でめまいが消失し、難聴も治癒した。

03

目の望診が、優先すべき情報を与え、治癒へと導いたのである。

望診とは何か

なぜ、この症例の題に「望診」を冠したのか。

問診票に従って職業を尋ね、「検品の仕事」と書かれていても、その重みは言葉の外にあったかもしれない。

望診とは、相手から伝わってくる情報を、えり好みせず、先入観をもたず、ありのままに受け取ることである。

目的をもって「見に行く」のではない。フィルターをかけず、伝わってくるものを、そのまま受け取るのである。

観の目と見の目 —— 宮本武蔵に学ぶ

宮本武蔵は『五輪書』で、「観の目を強く、見の目を弱く」と説いた。観は全体を見る目、見は一点を凝視する目である。

これを診察に移せば、観は「望」、見は「視」にあたる。現代医療は視（ミクロ）が強く、望（全体）が弱くなっている。

病ではなく患者全体を望て、その「声なき声」を聴く。職業や生活環境にまで目を配ることが大切である。

目の望診 —— 有神・無神 と「肝の窓」

目には五臓六腑の精気が流れ込む。目の望診では、有神か無神か —— 心身のエネルギーが充実しているか、衰弱しているか —— を見る。

本例の「異様にギラギラと光る目」は、肝胆の実熱の現れであった。

この一つの所見が、竜胆瀉肝湯を選ぶ決め手となった。

おわりに

「先入観をなくして患者を望る」
——それが望診である。理論は、その後でよい。

望・聞・問・切の
四診は、望診に始まり、望診に終わる。

そして望診は、診断にとどまらず、患者とのコミュニケーションと治療にまで結びついてゆく。